法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-07

ポストコロナのコミュニティー形態

黄, 凱 / HUANG, Kai

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院デザイン工学研究科
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies. Art and Technology
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
3
(発行年 / Year)
2023-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030200

ポストコロナのコミュニティー形態

Design of Community form of post COVID

黄凱
Kai HUANG
主査　赤松佳珠子

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The design begins with how to balance the relationship between the residence space and the office space, and it is a great contradiction that the balance of the living body can be realized and the resident can realize the home & office.

Key Words : COVID-19，Telework，Office，Housing

1. はじめに

コロナの流行が終わり、テレワークを導入する企業が増えている。 本研究の目的は、テレワークという新しいライフスタイルに必要な建築空間を考えることであり、生活空間とオフィス空間の関係をどのようにバランスさせ、生活者と居住者がホームとオフィスを実現させるかから設計がスタートする。 同時に、生活や仕事だけでなく、仕事や生活に必要な他のスペースも満たすために、異なるレベルの共有アクティビティスペースを挿入することも考慮する必要がある。従来の仕事とレジャーのパターンを壊し、「異なる世界」の住民が自然に日常生活に参加し、住宅がゆっくりと混ざり合っていくのだ。 同時に、さまざまな空間ニーズが考慮され、個人、グループ、社会生活のためのさまざまなレベルのオープンスペースが用意されている。

2. 職住融合空間

生活空間とオフィス空間の関係をどのようにバランスさせるのが大きな課題であるため、問題を分解してそれぞれの解決策を考えていく。

問題点：

1. 居住者が自宅で仕事をするために、居住空間とオフィス空間をどのようにバランスさせるか？
2. 生活密度を確保しながら、さまざまな人の多様なワークスペースニーズに応えるにはどうしたらいいのか。
3. 個人、グループ、社会生活のための空間を、同時満足した場所をどう提供するか？

解決策：

1. 従来の交通コア空間から、共有コア空間を実現する
2. 基準層の間にオフィス、シェアスペースなどを入れる。
3. 垂直ブロックの間に共有空間を入れるることにより、タワー空間の機能を拡張する

様々な居住者のニーズに対応する多様なフラットタイプ多様なカスタマイズを実現する､機能･プライベート空間の異なるアパートメントタイプを作る。

3. 敷地

図1 昼間人口

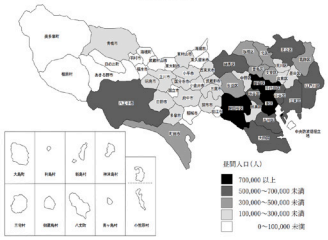
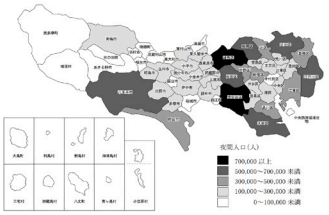


図2 夜間人口

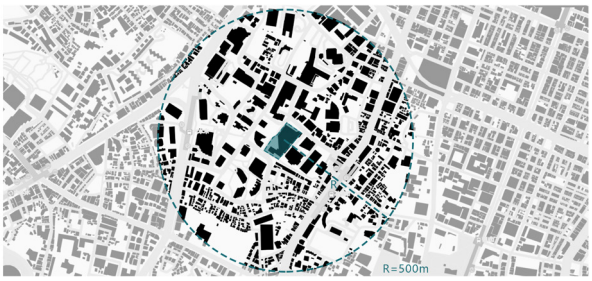


出典 「昼間・夜間人口、昼夜人口比率」 東京都の統計

人口の分部から見ると、都心部には、オフィスビルや商業ビルが立ち並ぶが、郊外から多くの人がやってくる。とくに昼間人口は多い、しかし、昼間、別の場所からやってきた人々は、夜になるとそれぞれの地域へと帰っていく、真んなかが開いたドーナツ化になっている。

そこで、「都心回帰」を求めて、人々を都心に住むように敷地を選んだ。

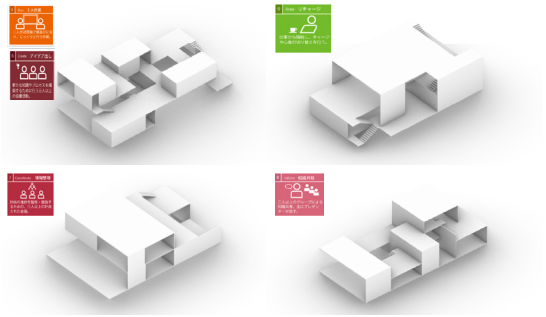
4. 提案

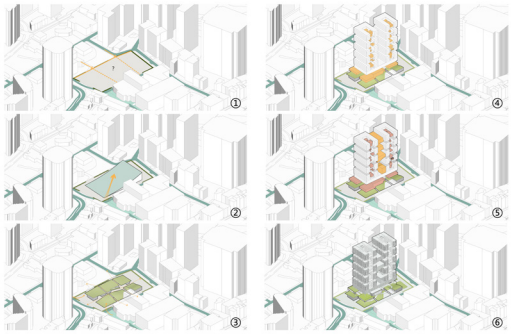


港区のオフィス街にテレワークをするサラリマンたちに居住と仕事同時にできる建物を設計する上で、都心のドーナツ化を改善する。

5. 設計

abw（Activity Based Working）という新しいワークスタイルからヒントをもらえって作業内容の分類に応じて、必要な作業空間を分ける。





建築全体は３つの空間レベルを作る：

Tier １、社会：

運動、ショッピング、レジャー

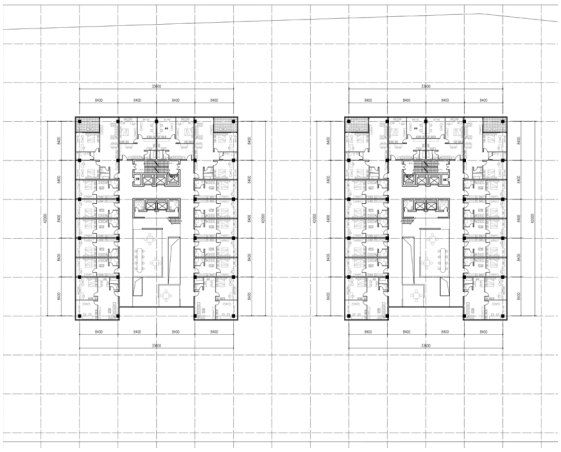
Tier ２、グループ：

コミュニケーション、フォーラム、コラボレーション

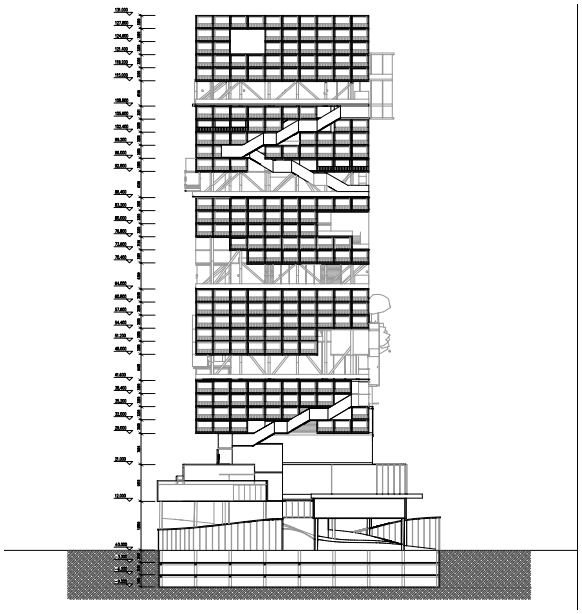
Tier ３、プライベート：

生活、勉強、仕事 - 集中

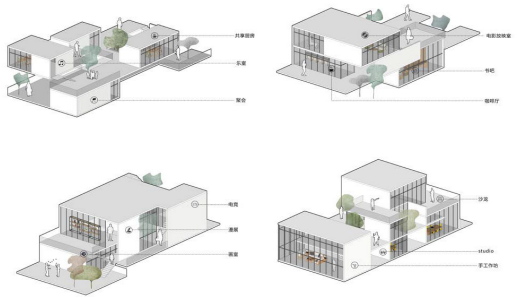
様々な居住者のニーズに対応する多様なフラットタイプ多様なカスタマイズを実現する、機能・プライベート空間の異なるアパートメントタイプを作る。



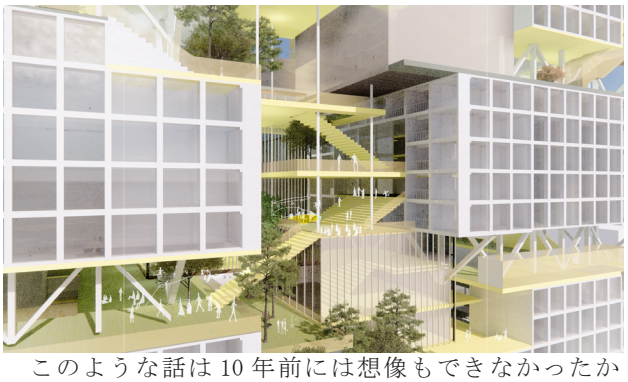
基準層平面



断面図



生活、仕事、遊びの境界を曖昧にし、交錯させる。
想像してみてください。恋人や子供たちが家にいるときに、会社から大事な仕事が入ったと知らされる。また、余暇を楽しむ前に、別の都市で地元や国内の同僚と今日行わなければならない会議の準備に専念する必要がある。 アパートメント棟の施設の一部として、ミーティングスペースを予約することができる。このスペースは、お客様のフラットから歩いてすぐのところにあり、その場で簡単にミーティングを行うために必要なものがすべて揃っている。 さらに、会議場は屋上プラザに隣接しており、ビルで提供される音楽､食事､飲み物を楽しむことができる。 会議終了後、会議参加者、地域住民などが広場に入る。 数時間後に階下のホールで行われるコンサートを待つ間、同僚と一緒に数時間おしゃべりして交流する。



このような話は 10 年前には想像もできなかったかもしれませんが、プライベートと仕事の世界が進化し、テクノロジーとの融合が進むにつれ、とくにコロナが終わったあとに、人々が共有空間の需要が高まり、ますます現実味を帯びてきている。この融合は、人々の生活、仕事、遊びの新しい融合を引き起こす。

6. 最後に

本研究により、ポストコロナでテレワークを普及していく時、職住融合の提案居住者のニーズに満足しながら、仕事も生活も影響がないようにあるいわ今あるコミュニティー形態より対応できる答えになっていると考えられる。

7. 謝辞

本研究を進めにあたり、様々なご指導をいただいた研究室の指導教員である赤松佳珠子教授に感謝いたします。研究室の所属期間は 2 年と短い間でしたが、教授には貴重なお時間を割いて何度もエスキスをしていただき、私を励ます、押して前進させます、大変多くのことを学ばせていただきました。また、指導教員である小野田泰明先生、副査である下吹越武人教授にもこの修士設計をより充実したものにするためにご協力いただき、大変感謝しております。

8. 参考文献

「ひとの住処 」1964-2020　 新潮新書　隈研吾
「新建築」2019 年 4 月号
「新建築」2016 年 10 月号 オフィス特集